

表参道の都市計画の地区計画と風致地区の変遷から見た緑地環境の関係に関する考察

Consideration on the relationship between the district plan of Omotesando city planning and the green space environment from the viewpoint of the transition of scenic areas

小木曾 裕¹
Yutaka Kogiso¹

Abstract : I considered the relationship between zelkova trees and buildings as seen from the district plan of Omotesando city planning and the transition of scenic areas. As a result, the average tree height of zelkova was 19.6 m, which was only 3 m lower than the average of buildings.

1. 背景と目的

旧都市計画の風致地区の第1号の指定「明治神宮内外苑風致地区」が1926年に指定され、その中で表参道が指定された。その指定意図は明治神宮崇敬に相応しい沿道の環境を維持するためとされている。その後、1971年土地利用状況の変化を踏まえ廃止される。そのような状況の中で、都内の並木道と街路沿の店舗は、都市施設として、注目を浴びる東京で指折りのエリアになっている。そこで、本研究は今後の都市整備上、多くの知見を得られると推察し、表参道の歴史を紐解くとともに、表参道エリアを都市計画的な視点で変遷を整理し、並木と建物の緑地環境・景観との関連を考察することを目的とした。

2. 調査方法

表参道の歴史・都市計画の概要を把握するため、文献調査と東京都・原宿表参道櫓会・明治神宮・加勢造園にヒアリングを実施した。さらにケヤキの高さと沿道の店舗の高さ測定を行い、総合的な考察を行った。

3. 結果と考察

1) 表参道の歴史概要・都市計画の緑地環境

昔は表参道のある原宿は2つの大地に挟まれ、低地は渋谷川の水田が広がり、川に向かって穏やかに下る斜面は、大名屋敷が広がって、原風景の要素は川(水路)であった。その渋谷川は東京オリンピックで暗渠化されたが、明治中期まで情景は葛飾北斎の「隠田の水車」にも描かれたような、牧歌的風景が広がっていた。現在の表参道の縦断地形は一度下がりまた上がり、分岐点に暗渠化された渋谷川の痕跡がある。表参道は明治神宮造営時にできた参道で沿道は屋敷の石垣が連なり両側の宅地割が大きく、緑の多いゆったりした土地利用からはじまったことに特徴がある。昭和初年建設の同潤会青山アパートのモダン

な景観も加わり、緑溢れる洗練された文化的イメージの高い商業ゾーンとなっていた。現在の代々木公園の場所は戦後、米軍に接収されワシントンハイツができ米軍の家族が表参道を訪れ、国際的な雰囲気醸成された。1960年頃からファッションタウンに進化してきたが、表参道の「風致地区」制度の指定と廃止については前述の通りであるが、その後、2004年には都市計画制度の表参道地区計画を定め、表参道の櫓並木と相俟って日本を代表する商業地として発展してきた表参道沿道の良好な景観と都市環境の維持増進を図り、さらに魅力あるまちなみを形成を一つの目標としていて、建築物等の最高限度を基本的に30mとして景観配慮をしている。また、地元商店会「原宿表参道櫓会」はこの表参道の商店街は現在まで表参道地域の生活環境の向上と商業の健全なる発展を目指し、多くの活動や企画に取り組んでいる。環境改善のために街路修景事業や美化推進などイベント等も行い、地元町内会とも連携をはかっている。

2) 表参道のケヤキ並木

ケヤキ並木の歴史は明治神宮内苑の完成した翌年1920年に201本植えられ、1930年代には7~8mになり、1945年の山手大空襲で表参道は火の海と化し13本を残し全て燃えて尽きてしまう。この無残なケヤキ並木の姿を、終戦で春日造園に復帰した加勢俊雄氏(加勢造園先代社長)は目の当たりにした。「我々は、先祖代々造園で飯を食わせてもらっているんだ。ここ一番並木を寄付で復活しよう」と叔父の春日時太郎氏(春日造園社長)は役所に出向き1948・49年に150本以上(幹回り1尺)を植えるという申し出をし、その美学が表参道のケヤキ並木を蘇らせる。1985年には17mの高さになり、2006年には24mにも成長したものもあり、本調査によると現在も素晴らしい並木となっていることがわかる。ケヤキの樹高平均は22.2mで最大32.9m、最小6.5mで一部、伐採されているものもあった。中心となる樹高は16.3mから23.5mであることがわかった。街路の建物高さの平均22.2mであり、中心は13.5mから30.8mであり、平均ではわずかにケヤキが3m低いだけに止まっていることがわかり、風致地区制度後土地利用の変化はあるものの、現在の地区計画の指定もあり景観の継続性が保たれていると推察する。

¹日大理工・教員・まち